
TRUTH

黒狐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

TRUTH

【Nコード】

N7860U

【作者名】

黒狐

【あらすじ】

あなたの中の身の周りの人は信用できますか？
人とは何ですか？
友達とは何ですか？
仲間とは何ですか？
生きるとは何ですか？
真実とは何ですか？

ゲームに負けた人には巨額の負債が降り掛かる。

勝つために騙せ！
勝つために裏切れ！
そんな騙し合いのゲーム
それが

『KRONOS』

あなたはこのゲームで人を信用することが出来ますか？

KRONOSの真実とは？

あなたは嘘を見破ることが出来ますか？

第一話 幕開け

第1回戦 リクトリスゲーム

「人に嘘をついてはいけません」

親や先生などから一度は言われたことはあるだろう。
そんなことを守っている人なんていないだろう。

なぜならー

人間は嘘をつく生き物だ。

自分の利益のためであれば平気で嘘をつく。

信頼していた友達も親も誰でも、皆誰もが嘘をつく。

こんな世の中では信頼することも信頼させることもできるわけがない。

綺麗事だけでは生きてはいけない。

綺麗事だけでは変わらない。

頼っているだけでは生きてはいけない。

頼っているだけでは強くなれない。

強者だけが上にいけ、弱者は強者に虐げられる。

これが社会なのだ。

これが現実なのだ。

これがルールなのだ。

これがセカイなのだ。

ザアアアアアア

激しい雨の音が部屋に響き渡っていた。

街頭の明かりが部屋を照らしていた。

部屋には畳が敷いてあった。その部屋にはテレビ、タンス、テーブルなどが置かれていた。

その部屋では家族がテレビを見たり、食事をしたり、話し合ったりしている部屋であった。いわゆるリビングというものであった。

今、その部屋には父が寝ていた。布団や枕も何も敷いていないところで寝ていた。

部屋の床は赤色に染まっていた。

部屋からとても生臭い臭いがした。

父の腹の辺りはとても真っ赤だった。真ん中にはキラツと光るものが立ってあった。銀色にひかり輝いていた。

その光が俺の顔を照らしていた。

部屋の真ん中で父親が死んでいたのだった。

血の池で倒れているかのように

俺はただ呆然と立ち尽くしているしかなかった。

雨はまだ降り続けている……………

「はっ！」

深見斗真は布団から勢いよく起き上がった。

「はぁ……はぁ……夢か……」

俺は頭を軽く押えた。

その部屋はボロアパートといってもいいほどの小ささだ。さらに車が走っている音や隣の部屋の人の声や音なども分かってしまうような壁の薄さ。キッチンとお風呂が付いているがかなり小さい。その代わり家賃はとても安い。

それがこの部屋の特徴といってもいいだろう。

部屋はとてもすっきりとしていた。家具はタンスが一つ、机が一

っただけであった。家電も電子レンジ、冷蔵庫、炊飯器、テレビくらいだ。家電といっても皆古いものだらけだ。テレビは知り合いから譲ってもらったものだ。ぐちゃぐちゃになっていることもないすっきりとした部屋だった。

そんな部屋に高校生の斗真は一人で暮らしていた。

机の上には全国模試の結果が無造作に置かれていた。そこには一位と書かれていた。全ての科目、そして総合も一位。さらには全てが満点という結果だった。

斗真は起きるとすぐに支度をして部屋を出て行った。

出かけた目的はバイトである。

斗真は中学生の時に、とある事情で家族はバラバラになってしまった。そのせいで斗真は毎日の時間がバイトで埋め尽くされている。なぜなら彼にはお金がないからだ。そうでないと生活がやっていけないのだ。

斗真は塾には通ってはいない。家庭教師も雇ってはいない。自己学習でここまでできたのだ。努力の賜物といってもいいだろう。

高校は特別優待制度で入っているので授業料も払わなくてよい。バイトをしているが勉強はもちろんおろそかにはしていない。テストでは毎回一位を取り続けている。しかも全て満点だ。

だれにも文句は言われぬはずだ。

今日のような休日はバイト三昧だ。

遊ぶ暇など一切ない。

そしていつものようにバイトが終わり、家に帰宅をしていた。外はもう真っ暗だった。暗闇を少しだけ照らしてくれる街灯には虫が集っていた。

そんな人通りが少なく、薄暗い道を通っていた。

そしてアパートに着くと玄関の前に誰かが突っ立っていた。俺と目が合うとその人は俺に近づいてきた。

「深見斗真だな」

その人は俺に言ってきた。その人は黒いスーツを着た男の人だっ

た。

「……なんですか？」

その男は俺に黒い封筒を差し出してきた。

その黒い封筒には、フカミトウマ様と白い字で書かれていた。

俺は黙ってその封筒を受け取った。

そしてその中身を見た。封筒の中には二枚の手紙と黒い小さな箱が入っていた。一枚目の手紙にはこう書かれていた。

フカミ トウマ様

KRONOSへの参加をお報告いたします。

KRONOSとはゲームの頂点を決める戦いのこと。

大会の勝者にはKING OF KRONOSの称号、そして副賞として500億円を与えられる。

優勝までの間に行うゲームに勝利することによって金を手にすることが出来ます。

優勝資格はゲームに勝ちつづけること。

この大会への詳細は別の手紙に書かれてありますのでそちらのほうをご参考ください。

なお、不参加の場合は罰金として1億円を支払っていただきます。

我々はどんな手段を使っても金を回収しますのでお気を付けください。

「もう一枚には開催日程と時刻、場所、注意事項が書かれている。そして箱の中にはネームプレートが入っている」

「……俺はこんなふざけたものに参加しない」

「あなたはこの生活から抜け出したいと思わないのか？」

「ああ、抜け出したい。でもこんなわけもわからない大会に賭けたくはない」

「そうですか」

「ああ」

男はポケットからひとつの紙切れを出した。

「ではこの借金はどうして払ってもらえますか？」

「借金？」

男はひとつの紙を見せた。

「なっ！」

男が見せたのは斗真の父さんの借書だった。その金額はなんと5億円だった。

「どうしますか？」

「くっ……」

「ふっ、ではこちらにサインを」

男はペンを俺に差し出した。

「ふざけやがって」

俺は大会に参加するしかなかった。

それしか方法はなかった。

「一つだけ注意はしておくが……逃げられると思うなよ」とするとそのときに勢いの強い風が通り抜けた。

そしてその男は歩き出した。

俺は呆然と突っ立っているしかなかった。

斗真の拳は強く握られていた。

そうして俺はKRONOSの開催場所の前までできて来た。来てしまった。

来るしかなかったのだ。

どつする^どことも出来なかつたのだ。
これから長い戦いになることを斗真はまだ何も知らなかつた。

第一話 幕開け（後書き）

どうも黒狐です。

はじめてのオリジナル作品です。

二次創作で

『ザ・クイズショウ〜ひぐらしのなく頃に〜』
という小説も作っています。

良ければ見に来てください！

僕は心理戦や頭脳戦が大好きらしいですwww

さてこの小説なんですが、一年前に受験勉強と同時に進めています
たwww

ライターゲームにハマっていたときです！

最近ではカイジにハマっています！

ゲームはもちろんオリジナルなので安心してください。
それを考えるのがとても難しいので少し更新が遅れるかもしれませんが。
ん。

二つのゲームは出来ているのでしばらくは遅れることはないかもしれ
れません。

更新を続けられるようにがんばりたいと思います。

今回は謎が多すぎる始まり方です！

気になりますねー！

次回はゲームのルール説明の予定です。

本格的な頭脳戦は3話くらいからです。

ライターゲームやカイジ的なゲームを募集していますwww
最後までお付き合いしてもらえれば嬉しいです。

誤字・脱字があれば教えてもらえるとありがたいです。

第二話 第一回戦 リクトリクゲーム

KRONOSの開催場所。

そこは大きな廃ビルであった。

そして入り口にはサングラスを掛けていて、黒いスーツをまとった二人の男が立っていた。その男たちの中には昨日、会ったやつではなかった。その男たちの体系は平均的な体格だった。

その二人の黒いスーツの男が俺のほうに近づいてきた。

「ネームプレートをお見せください」

俺はポケットから黒い箱を取り出した。

俺は二人の男の前でその箱を開けて、中身を見せた。そこには金色に輝く金が入っていた。

「ではフカミ様それを胸にお付けください」

俺は言われるとおりにネームプレートを胸に付けた。

こんな高価なものを付けるのは初めてかもしれない。

「では中にお進みください」

俺は二人の男の間を抜けて、中へと入っていった。目の前には大きな扉があった。

俺に試練を与えているかのように……

俺はその扉を開けた。

その中の部屋には参加者が4人いた。

全員、胸に金色のネームプレートを付けていた。他にはこのゲームの監視者のような人が部屋の端に立っていた。

横にある高級感が漂うソファで緊張をしている20代くらいの男性。ジョウノ。

中央に2人が立っていた。手に大きな黒いかばんを持っている30代くらいの男性。アダチ。

その横にはスーツを着ている30代くらいの男性。ハイバラ。部屋の端でびくびくしている20代くらいの女性がいた。ツキシロ。

俺は中に入って奥のソファに座った。

そして時間が少し経つと、前に設置されていた大きなテレビがいきなり点いた。その画面にはKRONOSという文字が浮かび上がっていた。そのテレビの横に両端にはさっきの男たちが立っていた。

『皆様、大変お待たせいたしました。これよりKRONOS第1回戦をはじめたいと思います』

参加者の全員はテレビに注目をした。

『では第1回戦のゲームを紹介しましょう。それは

『リクトリクゲーム』

『このゲームの説明を申し上げます。まず各プレイヤーに表が赤のカードを3枚、黒のカードを2枚と10枚のチップをお配りいたします。そして親のプレイヤーが赤か黒のカードを全員に見えないように伏せてもらいます。他のプレイヤーはそのカードが赤か黒を予想して、手持ちのチップを賭けていただきます。その予想した色が当たった場合、そのチップが2倍になって返ってきます。外れた場合は賭けたチップは没収いたします。これを皆さんには3回ずつ繰り返していただきます。そしてゲーム終了時に一番チップを多く持っていたプレイヤーの勝利となります。勝利プレイヤーは5億円を得ることができます。勝利プレイヤーが複数いれば、5億円を山別けになります。そして第2回戦への進出が決定します。敗者には1億円をお支払いいたします』

周りにはざわざわしていた。

『そしてゲームの間に30分休憩を取らせていただきます。皆さんが一回ずつカードを出し終えたときに30分休憩とさせていただきます。皆様には部屋を1部屋ずつお貸しします。入り口の扉の横のほうに部屋があります。扉の前にはプレイヤーの皆さんの名前が書いていますのでその部屋をお使いください。よろしいですね？』

その問いに答えるものはいなかった。全員が画面を凝視していた。

負ければいきなり一億の借金を背負ってしまうのだ。無理もない。『それでは休憩の前に皆様にこのゲームに必要なものなどのアイテムをお渡しします』

そんなことに気も止めずに、どんどん説明を進めていく。

画面の前に黒いスーツを着た3人の人の中央にいた人が5つ黒い箱を持っていた。

「皆様、このゲームに必要なアイテムをお取りください」

プレイヤー全員がその黒い箱を受け取るしかなかった。

『その箱の中には、表が赤のカードを3枚、黒のカードを2枚と10枚のチップと部屋の鍵と番号が書いたカードが入っております』

俺は箱の中身を確認した。黒と赤のカードには何も書かれていなかった。裏が一緒なだけだ。そして10枚のチップを箱から出した。『っ！』

チップはなんと金で出来ていたのだ。

他にも『1』と書かれたカードが入ってあった。

『箱に入っている番号の書かれたカードは自分が親になるときの順番です。皆様の順番はゲーム開始時に番号を皆様に公開いたします。ではただいまより30分間の休憩といたします』

すると画面が変わった。そこには29:59と書かれていた。その数字はどんどん減っていく。

休憩の残り時間だ。

すると周りの人は全員部屋に戻っていった。

まるで時間が動き出すように……

その時、俺はひとつの案が浮かんだ。

稲妻が落ちたかのように

勝てる、勝てるぞこのゲーム

実はこのゲームには必勝法が一つあった。

第二話 第一回戦 リクトリクゲーム（後書き）

どうも、黒狐です！

第一話で止めとくのも何なので更新することにしました！

今回はゲームの説明だけですが、次回からは本格的に動かすつもりです！

斗真の必勝法とは何なのか？

皆さんもその必勝法を考えてみてください！

すぐに更新できるようにがんばりたいと思いますんで！

誤字・脱字があった場合、教えてもらえるとありがたいです。

感想などもお待ちしております！

第三話 斗真の策

実はこのゲームには策が一つあった。

それはチームを組むことだ。チームを組めば確実にチップを二倍にできるのだ。自分が何を出すかを相手に伝えておけば、お互いのチップが二倍になる。どちらかが負けても賞金を山分けすれば借金を抱えることはまずないだろう。そしてこのゲームに勝つ方法はチームを3人組めば勝つ確率が多くなるのだ。参加者は5人だから3人いればいいのだ。

そして部屋へと向かった。

まず向かったのは横の部屋のツキシロさんだ。

ツキシロさんを選んだのには何も理由がなかった。ただ隣の部屋だったからだ。組むのなら誰でもいい。条件なんて関係がない。人数を集める方が先だ。

部屋の横にはチャイムがあった。俺はチャイムを鳴らした。でも返事は返ってこなかった。

そしてその横のハイバラという人のチャイムを鳴らした。

がちゃ

ハイバラさんが出てきた。

「少し話があるんだが」

するとドアを閉められた。そしてどこの部屋に行ってもチームに加わることができなかった。

なぜだ、チームを組めば……………っ！そうか、もうチームは出来ているんだ。くそっ！

俺は乗り遅れたことに気づいてしまった。

俺がこの会場に来る前に全員はチームを組んでいたのだ。そして話すら聞いてもらえない。その理由しかない。

誰かの手によって斗真は嵌められていたのだ。

早くも斗真は絶体絶命のピンチを迎えてしまったのだ。

第三話 斗真の策（後書き）

どうも、黒狐です。

今の所はどうでしょうか？

ハラハラドキドキしていますでしょうか？

もしもできたらな私はとても嬉しいと思います！

毎日、一、二話づつ更新していけばいいと思っています！

少し文章は短いですが、これからも付き合っていただければ嬉しいです！

最近の迷いは、第三回戦のゲームをどうするかです。

どうも決まったテーマに沿ってゲームを作るのはとても難しいです。

必勝法とかも難しいので大変ですwww

でも頑張っていきたいので、これからもよろしくお願いします！！！！

感想、アドバイスなどもお待ちしております。

誤字・脱字報告も出来ればお願いします。

3、4つは完璧に決まっているのですが、

第四話 ゲームスタート

休憩が明けてしまった。

斗真は何もすることが出来なかった。

ピンチという状況を変えることは出来なかった。

チームを組めないと言う絶望的な状況

『今からゲームを開始とさせていただけます。では今から順番を公開いたします』

すると順番が大きな画面に映された。

- 1、 フカミ
- 2、 ジョウノ
- 3、 アダチ
- 4、 ハイバラ
- 5、 ツキシロ

順番はこのようになった。

『では前のテーブルに書かれている自分の順番の所に座ってください』

『そして全員が座り終えた。』

横には黒いスーツの人が立っていた。

『ではフカミ様、前の方に移動してください』

俺は全員が座っている逆側の席に座った。

『どうやらここでカードを出すらしい。』

『ではフカミ様、カードを提出してください』

俺はすぐにカードを出した。

『では順番が早い人からチップを賭けてください。ジョウノ様からです』

各プレイヤーが賭けた色とチップの枚数は

ジヨウノ 赤 1枚
アダチ 赤 1枚
ハイバラ 赤 1枚
ツキシロ 赤 1枚

そうなるのは当たり前だろう。赤のカードは出す確立が高い数字だから。赤のカードに賭けるのはあたりまえだろう。でもカードを提出するほうも赤のカードが残り一枚になるというリスクを負わなければならぬ。1枚だと後から不利になっていくのだ。赤を出すタイミングは今が一番ベストとなる。

『ではフカミ様。チップの賭けが終わりましたのでカードを表にしてください』

俺はカードを裏返した。

そのカードは黒のカードだった。

俺はあえて黒を出したのだ。

他のプレイヤーは驚いていた。

『賭けを成功した人はいませんのでチップはすべて没収といたします』

フカミ 10枚
ジヨウノ 9枚
アダチ 9枚
ハイバラ 9枚
ツキシロ 9枚

そして順番は次に回った。

『ではジヨウノ様、カードを提出してください』

そしてジヨウノはカードを場に出した。

『では順番が早い人からチップを賭けてください。フカミ様からで

す^④

そしてここからゲームが大きく動き出したのだった。
各プレイヤーが賭けた色とチップの枚数は

フカミ	赤	2枚
アダチ	赤	3枚
ハイバラ	赤	9枚
ツキシロ	赤	1枚

やはり……

それは他のプレイヤーはチームを組んでいるのだ。だからすべてもチップをかけることができるのだ。

俺が考えていた策だ。やはり他の人にも思いついたようだ。

そして場のカードは赤だった。

プレイヤーのチップ枚数は

フカミ	12枚
ジヨウノ	9枚
アダチ	12枚
ハイバラ	18枚
ツキシロ	10枚

そしてここからどんどんチップの枚数に差が出てきた。

ゲームの歯車が動き出したのだ。

この一巡目で斗真は存在しているチームは誰と誰が組んでいるのかが分かった。チームを組んでいるのはジヨウノとハイバラ、ツキシロとアダチ。このようなチームだった。この1巡目で確信ができた。なぜならジヨウノさんがカードを提出したときにハイバラさんがすべてのチップを賭けて成功。ハイバラさんがカードを提出したときにジヨウノさんがすべてのチップを賭けて成功。アダチさんが

カードを提出したときにツキシロさんがすべてのチップを賭けて成功。ツキシロさんがカードを提出したときにアダチさんがすべてのチップを賭けて成功。この結果、誰と誰がチームを組んでいるのかはすぐに分かるはずだ。

一巡目、他のプレイヤーは全員が赤色のカードだった。斗真以外の人々が持っているカードは赤のカードが2枚、黒のカードが2枚だ。斗真は赤のカードが1枚、黒のカードが3枚。断然不利になっている。

ゲーム1巡目の各プレイヤーのチップの枚数の結果は

フカミ	18枚
ジヨウノ	21枚
アダチ	30枚
ハイバラ	24枚
ツキシロ	21枚

トップとの差は12枚。チームを組んでいない俺にとってはとてもきつかった。でも諦めるわけにはいかなかった。

動くとしたらこの休憩時間しかない。

そこで掴まないと終わり。

俺は諦めた訳じゃない。この策には使い方を誤ると隙間が出来る。そこをうまくつつけるかが問題だ。

第四話 ゲームスタート（後書き）

黒狐です。

えー、風邪を引きましたWWW

そのせいでしんどくてどこにも行けないので、小説づくりがはかどりそうです。

鼻水が止まりません。

大学の講義が終わったら、帰って寝ます！

さて、本題に入りましょう。

斗真の策は他の誰かも使っていました！

そして斗真はどうするのか？

そしてその策の穴とは？

次回もお楽しみください！

とてもエライので今日はここらへんで勘弁してくださいWWW

感想、アドバイスなどもお待ちしております。

誤字・脱字報告も出来ればお願いします。

こんなド素人な私に感想をください！

第五話 1 / 2 の確率

そして休憩時間が過ぎた。

『今からゲームを再開とさせていただきます。ではフカミ様、場にカードを提出してください』

俺は一回目と同じように、すぐにカードを出した。

『では順番が早い人からチップを賭けてください。ジヨウノ様からです』

各プレイヤーが賭けた色とチップの枚数は

ジヨウノ 赤 1枚

アダチ 赤 1枚

ハイバラ 赤 1枚

ツキシロ 黒 1枚

そう、このターンでは赤に賭ける可能性がもつとも高いのだ。もしも、斗真が黒を出したときは次の雄斗のターンは100%、赤を出すことが確定してしまうからだ。だからほとんどの人は赤に賭けている。

でもこのターンに黒を出さないことは断言できない。だから全員の賭ける枚数が少ないのだ。それに斗真は現在最下位だ。

だからリスクを背負う必要がないのだ。

『ではフカミ様。チップの賭けが終わりましたのでカードを表にしてください』

僕はカードを裏返した。そのカードは黒のカードだった。

そう、俺はあえて黒を出した。

「……なっ！」「」

他のプレイヤーは驚いていたが、ツキシロは普通にそのカードを見ていた。

『賭けを成功したツキシロ様には2倍のチップである2枚を差し上げます。他の皆様は没収とさせていただきます』
そして場のカードは赤だった。プレイヤーのチップ枚数は

フカミ 18枚
ジヨウノ 20枚
アダチ 29枚
ハイバラ 23枚
ツキシロ 22枚

2順目は当てることが非常に難しかった。確率は2分の1なのだから。

斗真にとつてはとてもきつい。

そして不安でいっぱいだった。

そして俺には赤のカードしか残っていないのだ。
ここまでの各プレイヤーのチップの枚数の結果は

フカミ 19枚
ジヨウノ 38枚
アダチ 31枚
ハイバラ 47枚
ツキシロ 43枚

『ではツキシロ様、カードを提出してください』

そしてツキシロはカードを場に出した。

『では順番が早い人からチップを賭けてください。フカミ様からです』

俺は必死に考えていた。

そして一分が過ぎる頃に斗真は決断した。

俺は全てのチップを掴んだ。

第五話 1 / 2の確率（後書き）

鼻風邪の黒狐ですwwww

早めに寝たんですが、さつき起きてしまったので更新することになりました！

斗真はどうなるのか、今後のゲームの展開を予想してみてください。とても眠いので誤字・脱字があるかもしれません。

あった場合は連絡してもらえると嬉しいです。

とてもエライのでこのへんで！

第六話 逆転の一手

『ではツキシロ様。チップの賭けが終わりまりましたのでカードを表にしてください』

ツキシロはカードを裏返した。そのカードは………赤だつた。

「ほら黒だ。お前は終わりだー……っえ……」
斗真は笑みを浮かべた。

「な……な……なにいいいいいい………どういふことだ、ツキシロオオオ！」

「ふっ、残念だったな……」
「な、なぜだ。なぜ黒を出さなかった！」

「アダチ。僕とツキシロさんは組んでるんだよ」
「い、いつから！」

「一巡目が終わったときの休憩時間に組んだ」

「ツキシロさん」

部屋の外にいたツキシロさんを俺は呼び止めた。

ツキシロさんは悲しそうな目で俺を見てから部屋に戻ろうとした。
「騙されているよあんた」

「えっ！」
ツキシロさんは俺を再び見た。

「アダチさんに俺と話すと言われてただろう」

「……」
「チームは二人で十分だと言うことも言っていただろう？」

「………はい」

「このままいけばあんたは負けるかもしれない。だからひとつ、提

案があるんだけど……」

「……わかりました」

俺はツキシロさんを部屋に入れることに成功した。

つまり話を聞いてくれること。

そして俺の策が一步進みだしたのだ。

列車がレールにのり始めた。

それがすべての始まりであった。

俺はアダチさんの策、そして俺が考えている策をツキシロに教えた。

「だから俺とチームを組もう。それが唯一俺とお前が助かる方法だ」

「残念ながらお前は脱落だ」

「く、くそおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおお」

アダチはテーブルを思いっきり叩いた。

『賭けを成功したフカミ様、ジョウノ様には2倍のチップを差し上げます。他の皆様は没収とさせていただきます。そして0枚になられましたアダチ様はここで敗者となります。ご退場いただきます』

黒服の男二人が寄ってきた。

しかしアダチは抵抗をした。

「ま、待ってくれ。ディーラーさんよ！このゲームを最後まで見ることはいいのか？いいだろっ！！！」

『構いませんが暴力行為やプレーヤーにアドバイスと見られるなどの妨害行為を行った場合さらに1億円の罰金が科せられますが、それでもよろしいですか？』

「ああ、構わない！」

すぐにアダチは断言した。

『では2巡目が終わりましたので30分休憩を取らせていただきますま

す』

そうして休憩タイムに入った。
斗真は笑みを浮かべた。

各プレイヤーのチップ枚数と残りのカード枚数は

フカミ 38枚 赤3枚 黒0枚

ジヨウノ 39枚 赤1枚 黒2枚

アダチ 脱落

ハイバラ 46枚 赤2枚 黒1枚

ツキシロ 43枚 赤1枚 黒2枚

俺はツキシロの部屋にいた。

そしてツキシロさんと話し合っていた。

「約束・・・覚えてるよね？」

「ああ、もちろん。じゃあ、やらなければいけないことがあるんで

.....」

そして僕はツキシロの部屋を出た。

『今からゲームを再開とさせていただきます。ではフカミ様、場に
カードを提出してください』

僕はまた、すぐにカードを出した。

『では順番が早い人からチップを賭けてください。ジヨウノ様から
です』

各プレイヤーが賭けた色とチップの枚数は

ジヨウノ 赤 39枚

ハイバラ 赤 46枚

ツキシロ 赤 42枚

そう賭けるのは当たり前だ。斗真の手持ちのカードは黒しかないからだ。赤は全部使い切ってしまったのだから。

そして、みんなは焦っているのだ。

ツキシロの裏切りによって……

『ではフカミ様。チップの賭けが終わりましたのでカードを表にしてください』

俺はカードを裏返した。

第六話 逆転の一手（後書き）

鼻風邪が若干直り気味の黒狐です！

昨日はゴミ箱がティッシュであふれるほど大変でした！

寝るしか方法がなかったwww

そんな話は置いておいて、本題に入りましょう。

斗真はツキシロを仲間にするということで危機を抜け出すことが出来ました。

ではなぜツキシロは斗真と組んだのか？

理由は二つあります。

今後の展開にご期待ください！

では今日はこの辺で！

第七話 決着

『ではフカミ様。チップの賭けが終わりましたのでカードを表にしてください』

俺はカードを裏返した。

そのカードは黒のカードだった。

「なっ・・・なぜだ。お前はもう使い切ったはずだ・・・」

「ああ、使い切った」

「じゃあなぜ！」

「でもこの黒のカード………ツキシロのカードなんだよ」

「なっ、そ・・・そんなの反則だー」

「誰が反則と言った？」

「なっ！」

「そう、ディーラーは何も言っていない。そうですね、ディーラーさん」

『はい。その行為は反則ではありません』

「そう、このゲームに勝つための方法はチームを組むことが有利だ。お前らがやっていたように自分のチップを増やすためにお互い出す色を教えることも一つの手法。他にもカードを交換し合うということもあるんだ。そしてハイバラさんにすべてのチップを賭けてもらうためにジヨウノさんに寝返ってもらった」

「なっ！そ、それもお前のせいなのか」

「ああ、2順目の終わりからジヨウノを寝返らせた」

「な、なぜっ」

「俺はお前たちの策に気が付いていたんだ。ハイバラさんとアダチさんが手を組んでいることに」

第七話 決着（後書き）

黒狐です！

昨日の夜中に更新することが出来ませんでした。
なので今日の夕方くらいに更新するつもりです。

もうすぐこのゲームは終わります。

ぜひ、楽しみにしていてください。

では、また！

第八話 隠された真実

『賭けを成功した人はいませんのでチップはすべて没収といたします。そして0枚になられましたハイバラ様、ジョウノ様はここで敗者となります』

黒服の男二人が二人に寄ってきた。黒服の男がハイバラを掴もうとした。

「待て」

俺は口を開いた。

「ハイバラさん、アダチさん。なぜツキシロさんは俺に寝返ったと思う？」

「そ、そんなのお前の策が一番いいからに決まっているからだろ」
アダチがすぐに答えた。

「いいや、それだけでは彼女は寝返ってくれなかった。彼女は僕に条件を出したんだ……………全員を救うことを」

「えっ」

「なっ」

「そうです。私はフカミさんと皆さんを救うことを条件に手を組みました」

「そう、このゲームの賞金5億は全員に返す。だからプラスマイナスゼロだ」

「……………あ、ありがとう」

アダチさんが小声で言った。

「お礼を言うなら彼女に」

そういつて僕は席に戻った。

最後のツキシロさんのターンは、俺のチップの36枚が没収とな

った

『ではこのゲームの最終結果をお知らせします』
そういうと画面が変わった。

フカミ 1枚
ジヨウノ 0枚
アダチ 0枚
ハイバラ 0枚
ツキシロ 1枚

『一位のフカミ様とツキシロ様には賞金の2億5千万円ずつ差し上げます』

斗真とツキシロの目の前にアタツシユケースが置かれた。そして黒服の男がアタツシユケースを開けた。そこには1億が入っているアタツシユケースが二つと5千万が入ったアタツシユケースがあった。

『KRONOS二回戦の詳細は後日にお送りします。ではこれでKRONOSの終了とさせていただきます』

するとKRONOSの関係者はすぐにこの会場から出て行った。俺たちは賞金を分け合って、みんなと分かれた。他の人たちにはたくさんお礼を言われた。

でもその二倍くらい、ツキシロさんは言われていたが、でも俺はその結果をよく思っていなかった。

第八話 隠された真実（後書き）

やっと鼻風邪が治った黒狐です！

次の話で第一回戦は終わりです！

やっと一つのゲームを終わらせることが出来ました。

これも読んでくださった皆さんののおかげです。

明日に第一ゲームの最終話を更新するつもりです。

ここまで読んでくださってありがとうございます！

これからもお付き合いできたらとても嬉しいです。

では、また！

第九話 第二回戦へ・・・

俺とツキシロさんは一緒に帰っていた。

帰り道が同じらしい。

「・・・・・・・・条件を飲んでくれて、ありがとうございました」

「ああ、こつちも助かった・・・・・・・・本当によかったのか？二回戦に進んでも。別に俺一人でもよかったんだけど……」

「はい、このゲームは一人では不利ですから、私もいたほうがいいと思ったので」

「無理しなくてもいいよ」

「別に無理なんてしてません」

「・・・・・・・・一つだけ言うておく。全員が助かることを考えるのはもう止める。これからはゲームのレベルが高くなっていく。だから、そんな理想はもう通じな」

「そんなことありませんっ！」

俺が話している最中に、ツキシロさんは立ち止まって俺に向かって叫んでいた。

ツキシロさんが怒っているように見えた。

俺は立ち止まってしまった。

「みんな協力し合えばこのゲームは勝てるんです！私は誰かが悲しんでいる姿は見たくありません！だから・・・・・・・・そんな悲しいことを言わないでください・・・・・・・・」

俺は何もできなかった。ただ立っているだけだった。初めてこんな人間を見た。自分の利益を捨てて、人のことを考える人・・・・・・・・。

信頼できるかもしれない

俺は一瞬、そんな感情を抱いてしまった。
でも俺は簡単に信用することはできなかった。

「………考えておく」

俺はそう言つて、その場から離れた。

今の俺にはそれしか選択肢がなかった。

早く離れたかった。

いや、混乱していたのかもしれない。

人間は欲で出来ている。

人間は嘘の固まりである。

そう思つて生きてきた。

この日までそうやって生きてきたのだ。

だから簡単に信用することなどできないのだ。

俺は信じることをあの日に、捨ててしまったからだ………

一つの薄暗い部屋があつた。そこはモニターがたくさんあり、部屋は画面の明かりによって照らされていた。そしてドアと反対方向には大きい机が置かれていた。その机の真ん中には一台のパソコンが置かれていた。

そのパソコンをいじっている一人の男がいた。

ガチャラー

そこに仮面をかぶつた人が部屋に入つて来た。そしてドアの目の前のところで動きを止めた。

「Gグループのゲームが終了しました」

「そうか………そういえばあいつはどうなった？もちろん勝つたと思うが………」

「はい、第二回戦に進出しました」

「ふっ、やはりな」

「では失礼します」

そういつて仮面の人は部屋から出て行った。

「二人に会うのが楽しみになってきたな。のぼってこい俺のところまでっ！……！」

第九話 第二回戦へ・・・（後書き）

やっと第一章が終了しました！

これから第二回戦の制作に入ります。

更新するのはもう少し先になります。

お待ちください。

この小説でも、ザ・クイズショウ〜ひぐらしのなく頃に〜（二次創作）でやっているようなラジオのような後書きにしたいのですが、

雰囲気がぶち壊しになるのでやめておきますwww

友達に「라이어ゲームと同じじゃねえーか！！！」とか言われたんですが、今のところはそうだと認めるしかありません。

しかし、ゲームの進行とかによるものは라이어ゲーム的な感じになると思いますが、KRONOSの目的、それに関わってくる陰謀なども後半からメインになっていきます。

この話の最後に出てきた男は誰なのか……KRONOSの真の目的はっ！！！！

乞うご期待ください！！！！

感想、アドバイスなどお待ちしております。

誤字・脱字報告も出来ればお願いします。

『次のゲームもあなたの参加をお待ちしております』

第十話 第二回戦 デイデュースゲーム

俺はいつも通りバイトに通っていた。

そのバイト先はファミレスだった。

斗真は接客を担当していた。

「深見君」

「はいっ」

店長の声がかかっていたので俺は振り向いた。

「今日から前に言っていた新入りが入ったから、この子に指導よろしくな。頼んだぞ！」

「なっ！」

俺は驚いてしまった。

「っ、月城希です。よろしくお願いします」

その新入りは、KRONOSで出会ったツキシロさんだった。

希はぺこりと頭を下げた。

そうして俺は月城にここのバイトのやり方を教えていた。

「何でここ受けたの？」

「生活費に困ったからです。別に深見さんがいたから来たわけじゃないですよ。一週間前に採用してもらいましたから」

「……そうなんだ。じゃあなぜ……」

「深見さん？」

「い、いや、何でもなし。あれから何かあったか？」

「いえ、ありません。深見さんは？」

「俺も何もなし」

「…あの」

「ん？」

「あれから考えてくれましたか？」

「……………」

俺は黙ってることしかできなかった。

「深見さん、月城さん。お客さんが来てるよ」

店長が遠くで叫んでいた。

「今、行きます」

その客はKRONOSの招待状を渡されたあの男だった。

「まずは第一回戦通過おめでとう」

「……………」

「もちろん用は分かつてると思うが二回戦の招待状を渡しに来た」

男は俺達に黒い封筒を差し出した。

「今回も前と同じようなことができるかな？」

俺は黙って強引にそれを受け取り、その場から離れた。

俺はKRONOSの二回戦の会場に来ていた。

その会場は前の会場と違い、そこは町外れの山奥にあった。その建物の外見は昔の宮殿みただった。

俺は会場の扉を開けた。

ドアを開けた先には前とは違う部屋だった。部屋の中心には真ん中が大きくくり抜かれている机があった。そして仕切りがあり、机の上にはテレビが置いてあった。その周りには9個の椅子が置いてあった。部屋に置くにはソファが置いてあった。部屋の両端には丸い部屋がくつついていた。入り口の端にはカーテンが束ねられていた。中には高くて小さなテーブルが置いていた。ドアはないので何をしているかは丸見えだ。右のほうの部屋には三人がいた。ネームプレートにはコバヤカワ、モウリ、キツカワという三人の男性がいた。

もう片方には二人がいた。ヨコミゾという男性、マツモトという女

性が一人。

大きい部屋には二人が立っていた。サングラスをかけているフクヤマという女性が一人、ヒガシノという女性が一人。奥のソファーには月城さんが座っていた。

俺は奥のソファーに座った。

『では全員そろいましたのでゲームを始めたいと思います。皆様、中央にお集まりください』

前に設置されていた大きなテレビがいきなり点いた。その画面にはKRONOSという文字が浮かび上がっていた。

そのテレビの横に両端には黒いスーツの男たちが立っていた。

そして全員が真ん中に集まった。

斗真の上に画面があった。俺はソファーから立って、少しはなれて上の画面を見た。

『ではさっそく第二回戦のゲームを紹介しましょう。それは

『ディデューズゲーム』

第十話 第二回戦 ディデュースゲーム（後書き）

皆さん、久しぶりです！

黒狐です。

第二回戦の始まりです。

やっと書き終わる事が出来たので、更新しました！

これからは一日に1、2話にします。

気まぐれという事でwwww

最近はさらに忙しくなってきました。

バトルスピリッツというカードゲームは新弾が発売して、デッキも組み立てないといけませんし……

さて、本題に入りますが、この第二回戦から物語は加速していきま
す。

ライアーゲームとは少し違ってきます。

友達から「後書きが長い！」と言われましたが、皆さんはどうでしょう
うか？

じゃあ、ここら辺で！

感想、アドバイスなどお待ちしております。

誤字・脱字報告も出来れば嬉しいです。

第十一話 ゲームスタート

『ではさっそく第二回戦のゲームを紹介しましょう。それは

『デューゲーム』

『説明をする前に皆様、今から画面に表示される席に着席してください』

画面が変わった。僕は今の位置と間逆の位置だった。僕から右は、モウリ、ツキシロ、ヨコミゾ、キツカワ、フクヤマ、コバヤカワ、マツモト、ヒガシノだった。

そして全員が席についた。

『では説明をいたします。このゲームは1から10までの赤と黒のカードを使用します。そこから皆様に2枚カードをお配りいたします』

すると後ろの扉から出てきたスーツの人たちはプレイヤーに黒い封筒を配りだした。

『その封筒の中には2枚のカードが入っています。しかしその中にはある数字が一つありません。皆様にはそれを当てていただきます。もちろん今すぐに当ててもらうものではありません。ゲーム開始の1時間後に2枚のうち1枚を左のプレイヤーに渡していただきます。それを繰り返していき、抜けている数字がわかったときはカードを渡す前にディーラーに申告してください。申告をするのでしたら、カードを渡す前に手元にある1から10までの数字のボタンを押してもらいます。そしてその数字があつていればそのプレイヤーは勝者となります。間違っていた場合は敗者となります。ゲームから離脱したプレイヤーの手札は皆様に公開されません。なお、申告した数

字は他のプレイヤーには伝えられません。このゲームでは三人の勝者が出たときは、ゲーム終了となります。その場合残っているプレイヤーは敗者となります。最後に注意事項あります。カードの交換、カードに傷や印を付ける行為は禁止となっています。あとこちらが暴力行為だと思われる行動をとったプレイヤーも敗者となります。皆様には部屋を1部屋ずつお貸しします。入り口の扉の横のほうに部屋があります。扉の前にはプレイヤーの皆さんの名前が書いていますのでその部屋をお使ください。このゲームの勝者には3億円を差し上げます。敗者には一億円をお支払いしてもらいます。よろしいですね』

周りからは少しざわついていた。

『ではゲームを始めたいと思います。では……スタート』
前の画面はあと59分59秒に変わっていた。

そしてすべてのプレイヤーは一斉に動き出した。

俺はツキシロさんのそばに寄った。

「一つ作戦を思いついた。俺の部屋に来てくれ」

「わかりました」

そして俺たちも動き始めた。

ブルブルブルブルッ

斗真の部屋の電話が鳴った。俺はその電話に出た。

「はい」

『もしもし。わしはモウリや。フカミさん、ちょっと協力してほしいことがあるんやけど、時間ええか?』

電話の主は関西弁のモウリさんであった。

「……はい。多分チームを作るということでしょう」

『おおっ! さすがやな。こんな人にかけたのは、わしはラッキーやわ』

「でも、もう少し時間をくれますか？」

『何でや？』

「実はツキシロさんと大事な話をしている最中で……」

『……………』

「安心してください。このゲームのことではありません。このゲームが始まる前にもめてしまひまして……………」

『なんや、そうなんか』

「でも大丈夫です。すぐに終わりますから」

『そ、そうか』

「では俺の部屋にはツキシロさんがいるので10分後くらいに俺の部屋にきてください。それまでには話をつけるんで」

『あんだ、準備ええな。じゃあ10分後に行かしてもらいますわ』

そして電話が切れた。

俺は月城さんの方を見た。

「じゃあ、作戦開始だ」

第十一話 ゲームスタート（後書き）

どうも、黒狐です。

暑い……

さて、一つ愚痴を言ったところで今回の解説といきましょうWWW
今回のゲームからこのゲームの真相に近づいていきます。

大学の方も将来に向けて走り出しました！
どっちも頑張っつていこうと思います。

昨日、また新たなゲームが生まれたので、四回戦までは更新する事
がほぼ確定しました！
では、また明日！

感想、アドバイスなどお待ちしております。
誤字・脱字報告も出来ればお願いします。

第十二話 チーム

コンコンッ

俺はドアを開けた。

そこにいたのはモウリさんだった。

「お待たせしてしまって申し訳ありません」

「かまへん」

俺はモウリさんを部屋に入れた。

「どうも、わしはモウリ。よろしくな、ツキシロさん」

「はい、お願いします」

ツキシロは頭を軽く下げた。

「ではわかつていると思うが、カードの番号教えてもらおうか？」

「わかっています。とりあえずこちらに来て下さい」

雄斗とモウリが考えているのはチームを組むことだ。チームを組むことによつて、よりカードの情報がわかる。そしてチームが三人なのは、勝者が三人しかなる事ができないからだ。

三人は丸いテーブルに集まっていた。

「じゃあ、せーので自分のカードを出しましょう。いいですか？」

「大丈夫や！」

「・・・うん」

「じゃあいきますよ。せーの！」

テーブルに出されたカードは

フカミ 9、1

ツキシロ 5、1

モウリ 3、7

「じゃあ抜かれたのは3、4、6、8、10のどれかですね」「せやな」

「でも二つのカードが揃うなんてついてますね」

俺はモウリさんが出したカードを手に取った。そしてモウリさんに渡した。それをモウリさんは受け取った。

「そやな、俺たちが1のカードを誰にも渡さへんかったら、どこのチームも最後は二者択一になるからな」

そう、チームに二つの同じ数字がある場合誰もその色は元々抜かれていたのもか誰かが止めているものなのかわからないのだ。

「じゃあわしは失礼するわ。少し休みたいねん」

「わかりました。ではまた」

そしてモウリは部屋から出て行った。

「月城さん、少し出てくるから」

「わかった」

そして俺は部屋から出た。

第十二話 チーム（後書き）

最近、サブタイトルを決めるのが遅くなってしまいました。ゲームが進むたびかぶったりしてくるので少しきついです。

さて、チームが結成いたしました。これは吉と出るのか？凶と出るのか？

次回お楽しみに!!!

感想、アドバイスなどお待ちしております。

誤字・脱字報告も出来ればお願いします。

第十三話 響く声

休憩時間が終わった。

そしてプレーヤー全員は席についていた。

『では時間になりましたのでゲームを再開したいと思います。その前に抜いた番号がわかった方は1分以内に画面に移っている番号を選択してください』

そして1分が経過した。

『では時間となりましたので終了とさせていただきます。そして番号を選択された方が……いらっしやいました』

「えっ！」

「うそっ！」

「なんで」

周りからは声が聞こえた。

バンッ

そしてモウリが立ち上がった。

「うははははははははははははははははは。お前らって……馬鹿じゃないの！はははははははははははは」

「おまえが宣言したのか」

「何でわかつたの？」

「俺だけじゃない」

「じゃあ……他は？」

「俺たちだ」

その人物はキツカワとコバヤカワだった。

「何であんたが」

「どうしてだ」

「なんでっ！」

第十三話 響く声（後書き）

黒狐です。

アニメ『カイジ 破壊編』では遂に一玉40000円のパチンコ台『沼』の攻略が開始されました！

ギャンブルのアニメでパチンコを出す発想力が凄いです。

僕もそんな才能があればな！。

映画も楽しみだな！。

『沼』が超かつこいい！！！！

さて今回は、斗真たちがチームを組んだ事が凶と出ました。

これから斗真と希は、果たしてどうなるのか？

お楽しみに！

第十四話 隠れていたもの

『宣言されたのはモウリ様、キツカワ様、コバヤカワ様、』

「やはりその三人」

コバヤワカが割り込んで言った。

「はははっ」

モウリたちは笑みを浮かべていた。

周りには暗かった。重い空気だった。

『フカミ様、ツキシロ様、フクヤマ様の6人です』

「……ちよつと待って。今なんて？」

『では、もう一度いいます。宣言されたのはモウリ様、キツカワ様、』

コバヤカワ様、フカミ様、ツキシロ様、フクヤマ様の6人です』

「な、なぜだ！」

「そう、答えをわかっているのはお前達だけじゃないってことさ」

「ありえない。そんなことありえない！」

「いいや、あり得なくはないだろ。俺はモウリさんがチームを組んでいること、そしてモウリさんの策の事を知っていた」

モウリは他の二人を見た。

「お前達がばらしたのか！」

「違う、俺は何もしていない」

「俺もそんなことはしていない」

二人は慌てて否定をした。

「ああ、二人は何もしていない」

「じゃあ、どうしてだ！」

「同じ事だ。俺たちもチームを組んでいたんだ」

そしてツキシロさんとフクヤマさんは斗真の横に並んだ。

「実はフクヤマさんに誰がどの部屋に入るか探ってもらった。そして俺たちは、お前達がモウリさんの部屋に集まっていることを知っ

て、繋がっている事を確信した。そして、僕たちは違う策に変更した。それがこの状況を作り出したわけだ」

「でもその三人全員が全てのチームに入っているわけじゃない」

「ああ、そういうことだな」

「だとしても俺たちはこの全員のカードを確認したんだ！間違っている訳がない。勝ちも確定しているんだ」

「そうだといいな」

「そうに決まっている！」

「こんなところで言い争わずに、結果を見たらどうだ？それで全てが分かるだろう」

斗真は笑みを浮かべた。

「強がりやがって……………」

『モウリ様、フカミ様。もう続けてもよろしいでしょうか？』

「ちっ！どうせ間違ってる」

「ああ」

『では結果を発表します。六人中三人の方々は見事正解を当てられました。そして、残りの3人は残念ながら不正解です。よって、3名が勝者となったので残りの皆さんは敗者となります』

そのときに周りは泣き叫んでいたり、悔しがっていたりした。

そう、宣言していない人の負けが決定したからである。

「ふっ、あはははははははははは！！やはりそうだ！おまえが間違っていたんだ！！！」

「そうだよな、俺たちは間違ってたなんかいない」

キツカワも自分にそう言いかけた。

『ではその正解した3名を発表いたします。その3名は……………沈黙がその空間に流れ込んだ。』

第十四話 隠れていたもの（後書き）

どうも、黒狐です。

いつも通り12時くらいに更新しました！

タイトルを付けるのが大変になってきました。

これからタイトルはどうなるのか？

タイトルを省いてやろうかwww

いっその小説を投げ出してやろうかwww

さて、冗談もここまでにして、今回の話ですが、やっと斗真が動いてきました。

しかし、全員のカードを把握したモウリ達を倒せる事が出来るのか？
勝つのはどちらのチームなのか？

次回、お楽しみに！！！！

PS、十二話から第何話の第が抜けてました。

すいません。

感想、アドバイスなどお待ちしております。

誤字・脱字報告も出来ればお願いします。

見つけた方には私の感謝の気持ちを差し上げますwww

言い換えれば何もありませんwww

では、次回で！

第十五話 決着

『ではその正解した3名を発表いたします。その3名は……』

フカミ様、ツキシロ様、フクヤマ様です』

「なっ！……ち、違う！間違いだ！そっちの間違えだ！必ず合ってるはずだ」

「モウリ」

部屋に斗真の声が響いた。

「間違えているのは……お前だ」

「……何？」

「みんなから集めたデータの中はすべてが正しかったのか？」

「全部合っていた。枚数も何もかも！」

「ああ。すべて合っているはずだ。でも不正解だった理由は、俺達がモウリさんに嘘の数字を教えたからだ」

「どうやって！抜いた数字なんて誰も持っていないし、交換する事は禁止だったはずや」

「ああ、そうだ」

「じゃあ、どうやって！」

斗真はポケットから手を出した。その手には1から10まで赤色と黒色のランプを手に使っていた。

「な、なんでそんなものをもっとんねん」

「それはここのディーラーに用意してもらったからだ」

「なっ！」

「でも全く同じ物のはなかった。だが」

俺はカードをひっくり返した。そのカードに裏の模様が明らかに違った。

「なっ！」

「裏の模様が違うものを使ったのさ。そして俺はお前達が使った策を知っていた」

「でもどうやって抜いた一枚がわかった？」

「まずは最初に三人でカードを見せ合った。その後、フクヤマさんのチームの三人のカードを知らせてもらった。その結果はすべてバラバラの数字だった。その結果により6枚のカードが把握できた。そして俺と月城さんのカードは1組重なっていた。そしてモウリさんのカードを見せてもらい、その時点で9枚のカードが把握できて答えがわかった。一応そのカードが偽物かどうかも確認した。俺達はモウリさんとカードを見せるときに俺と月城さんが重なっていた1組のカードをその抜かれた数字とすりかえた。そしてモウリさんは僕たちの罠に引っかかった」

「それじゃあ、俺たちが見せ合ったときに抜けていたカードはまだ分からなかったはず！」

「ああ、その通り」

「じゃあどうやってっ！」

「俺達が見れなかったところのチームの人のマツモトさんをチームに加えたのさ。そしてその抜けた数字が分かったんだ。あんたが来るまでの10分間にね」

「なにっ！」

フクヤマが斗真とモウリの会話の間に入って、しゃべり始めた。

「しかし、フカミさんが外に出たのを目撃されるのはとても危険なこと。だからマツモトさんを味方に付けたのは私よ」

「だから俺達は全ての情報を誰よりも早く知ることができた」

斗真はモウリに近づいていった。

「俺たちの勝ちだ」

「くっ、くそおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお」

モウリさん達は床に崩れ落ちた。

『勝者のフカミ様、ツキシ口様、フクヤマ様には賞金の3億円を差し上げます』

斗真と月城とフクヤマの目の前に9つのアタッシュケースが置かれた。そして黒服の男がアタッシュケースを開けた。そのアタッシュケースには1億ずつ入っていた。

『三回戦の詳細は後にお送りします。ではこれで終了とさせていただきます』

するとKRONOSの関係者はすぐにこの会場から出て行った。

「皆さんにお話があります」

希が言った。その声は部屋に響いた。

「皆さんの6億円は、皆さんにお返しします」

「くっくっくっ！」「くっく」

「でも約束して欲しいことがあります。その約束はみんなを信用できるようになってください。それだけです」

「な、なんでそんなことを」

「みなさんはただこのゲームに巻き込まれただけじゃないですか。だから……」

「ほ、本当にごめん……騙したりして」

モウリは泣きながら俺達に土下座をした。それにつられてキツカワとコバヤカワも土下座をした。

「あ、頭を上げてください」

希は三人の頭を上げさそうとしていた。周りは泣いていた人やうつむいていたりする人がいた。

「皆さん、お金を受け取ってください」

「あ、ありがとう……本当に、ありがとう」

モウリは希の手を握った。

それからも他の人から何回もありがとうがとうを言われ続けていた。
フクヤマは微笑んでいた。
斗真はうつむいていた。

第十五話 決着（後書き）

大学が本格的に忙しくなってきました。

なので後書きを書いている力がありません。
次回が第二回戦の最終話です。

第三回戦を書くのが心配になってきました。
まあ、その辺りは明日に、ということので。
早いですけどこの辺でっ！

感想、アドバイスなどお待ちしております。
誤字・脱字報告も出来ればお願いします。

第十六話 フクヤマの正体

斗真と希とフクヤマは二回戦の会場から出ていた。

「説明してもらおうか？」

斗真はフクヤマを見た。

「姉さん」

「えっ！」

希はフクヤマを見た。

「ふふっ、バレてたか」

フクヤマはカツラとサングラスを外した。

「久しぶりね、斗真。変わってないわね」

「あのときだけだな」

「えーと、ツキシロさんでいい？」

「えっ、はい……」

「私、斗真の姉の深見優里^{フカミユリ}。よろしくね！」

「っ、月城希です」

「ごめんね、騙してて」

「い、いえ。こちらこそ条件をのんでくれてありがとうございます」

「別にいいわよ、私もこのKRONOSはよく思っていないからね」

「……姉さん、なぜ偽名で参加してるのか教えてもらおうか？それともこのゲームの関係者か？」

「残念、私は関係者じゃないわよ。このフクヤマって名前……私の友達の名前なのよ」

「つまり代理参加ってことか？」

「正解！」

「確か姉さんって警部だったよね」

「ええ、でもこの件に関しては警察は動いてくれない」

「何かの圧力がかかっている」

斗真は自分が考えだした案を言った。

「多分ね」

「じゃあ、この大会は一体なんなんだ！」

「……………私にもわからないわよ。謎だらけだで気になるし、そして友達が困ってたから代理参加しただけよ」

「……………俺はこの大会のファイナルに進む。そしてこのふざけたゲームをぶっ潰す！」

優里と分かれて、俺と月城は二人で道を歩いていた。

「……………なあ、月城。お前に……………賭てもいいかもしれない」

「なんですか？賭けるって。素直に言ったらいいじゃないですか」
希は今まで見たことのないような笑顔を俺に見せた。

「……………」

「深見さん、顔赤くなってますよ！」

不意にも顔を赤くしてしまったようだ。

「わはははははは」

「う、うるせー……………ふっ、ははは」

俺も笑えるんだ……………

笑うことが出来るんだ。

俺はもう笑えないと思っていた。

あの日から……………

第十六話 フクヤマの正体（後書き）

第二回戦終了しました。

このゲームは長くなるぞーと思っていたのですが、必勝法のせいで台無しですwww

皆さんはどう思いましたか？

でも次の三回戦から長くなる予定です。

なので三回戦を書くために、長い休暇をいただきます。

でもゲームや必勝法が出来ているので、休暇は思っているほど長くないと思います。

斗真の過去もまだ分からないと思います。

実は僕も決めていませんwww

4、5個は浮かんでいるんですけどね。

これからも頑張っていくので応援よろしくお願いします！

感想、アドバイスなどお待ちしております。

誤字・脱字報告も出来ればお願いします。

第十七話 第三回戦 天国と地獄ゲーム

第二回戦が終わってから斗真はいろいろな事を考えていた。

KRONOS……………何か引つかかる。何か、わからないが頭の中で引つかかっている。

そして斗真にはもう一つになる事があった。

それは――

ピンポーン――

家のチャイムが鳴った。

俺はKRONOS関係の人だと思った。なぜならこの家のチャイムが鳴ったのはKRONOSへの参加の手紙をもらったときが久しぶりだからだ。

月城さんという可能性もあるが、俺は自分の家を教えていない。だからこの家のチャイムを鳴らす人はKRONOS関係の人しかないだろう……………

ガチャーン――

「はい」

「ヤッホー！元気？」

開いた扉から顔を出したのは姉さんであった。

どうやら予想はかなり外れたようだ。

そして俺は姉さんを家の中に入れた。

「へえー、まだ全国模試で一位取ってるんだ」

優里は机に置いてあった模試の結果の紙を見ていった。

「まあね。それで、どうしたの？姉さん」

「少し聞きたい事があるの」

「聞きたい事？」

「斗真はなぜこの大会に参加したの？別に強制参加じゃなかったはずだと思うけど」

「えっ……」

「どうかした？」

「俺は父さんの莫大な借金の肩代わりとして参加した……もしかして姉さん、知らない？」

「知ってるわよ、詐欺師に騙されたときのことは斗真も知ってるはずでしょっ！」

「そんな金額じゃない……」

「そんな……金額じゃない？」

「五億だ」

「えっ！」

斗真は立ち上がり自分の部屋にあるタンスを探り始めた。

「騙されてるんじゃない？」

「いや、ちゃんと借借書もある」

そして斗真は優里の前に一つの紙を見せた。

「そして、父さんの字だ」

優里はそれを隅から隅まで目を通した。

「じゃあ……父さんは詐欺師に騙されて死んだんじゃない……」

「このKRONOSに殺されたんだ……俺はそうだと思う……」

「じゃ、じゃあこの大会に私と斗真が参加したのは偶然じゃないの。そしたら賢吾もっ！！！！」

深見賢吾。賢吾は俺の兄である。深見家の長男だった。姉さんと一緒である日、父さんが死んだ日から連絡を一切取っていなかった。ピンポーン……

次こそKRONOSだと俺は思った。

そして俺はドアを開けた。

そこにいたのはやはりKRONOSの関係者であった。

その男はいつも俺にKRONOSの招待状を渡したあの男であった。

「第二回戦突破おめでとございます。おや、今日は深見優里様も一緒ですか。ちょうどいいので、お二人に第三回戦の招待状をお持ちいたしました」

その男は二つの黒い封筒を斗真と優里の前に差し出した。

「第二回戦の結果があなたの答えなのですね」

「KRONOSはいつから始まったっ！」

「その質問にはお答えできません」

「じゃあ、深見賢吾はこの大会に参加しているのか？」

「その質問にもお答えする事は出来ません」

「くそっ！」

斗真は自分と優里の封筒を奪うように受け取った。

「絶対お前達には負けねえ。俺がこの腐った大会をぶっ潰す!!!」

「ふふふ…はははははははははは…楽しみにしていますよ」

男は不気味な笑みを残して、この場から去っていった。

その姿を俺は睨むしかなかった。

第十七話 第三回戦 天国と地獄ゲーム（後書き）

遅くなつてすいません。

これからは不定期に更新していきます。

今回は斗真の過去について少し触れてみました。

第三回戦の天国と地獄ゲームは結構力作になるのではないかと思っています。

土日頑張らないとっ！

感想、アドバイスなどお待ちしております。

誤字・脱字報告も出来ればお願いします。

第十八話 ゲームスタート

そうして俺はKRONOS第三回戦の集合場所へと来ていた。

そこには建物など何もなかった。しかし、目の前には一台のバスが止まっていた。そして、そのバスの扉の両脇には仮面をかぶったKRONOSの関係者だと思われる人が立っていた。

「深見斗真様ですね？」

「はい」

「深見さーん」

横から希の声が聞こえてきた。

そうして俺たちは第三回戦の会場に向かうバスに乗り込んだ。バスに乗っているのは斗真と希だけだ。

そしてバスは動き出した。

「深見さん、今回もよろしくお願いします」

「ああ」

「お姉さんは？」

「まだ来てない。あと、その深見さんっていうのやめた方がいいぞ」

「そ、そうですね。じゃあ、斗真さんって呼びます」

「……ああ」

そして姉さんが現れた。

するとバスは動き始めた。

どうやらこれで全員らしい。

そして、俺たちが乗っているバスは中に乗っている人がどこへ行っているのか確認出来ないような工夫がされていた。

そうして俺たちは第三回戦の会場に足を踏み入れた。

第三回戦の会場は、山奥の教会のような場所だった。今ではもう

使われていなさそうだった。

俺たちはその教会に入っただけだった。

教会の中は普通の教会と全く違った。とても広く、中は第二回戦の時と似ていた。前には大きなテレビ画面。しかし、今回は大きなテーブルなどなかった。

そしてそこには、第三回戦の参加者達がいた。

金髪でサングラスをかけている。トダ ケンタ

ヘッドホンを首から下げている。コニシ タケ

化粧をしているギャル。サタケ レイカ

本を読んでいるとてもまじめそう。イシダ カツヤ

カチューシャをしている女性。タマル シホ

そして奥のソファに座っている人物が一人いた。

「なっ！」

その人物は……

「賢吾っ！！！」

俺の兄である深見賢吾だった。

姉さんはすぐに賢吾の元に駆け寄った。

「久しぶりだね姉さん。そして斗真も」

「賢吾。何もなかった？」

「別に何も無いよ」

「なんで賢吾はこの大会に参加したの？」

姉さんは賢吾のことがとても心配だったらしい。

『皆様、大変お待たせいたしました。これよりKRONOS第3回戦をはじめたいと思います』

姉さんの話に割り込んできた。

参加者の全員は前にあるテレビに注目をした。

今回もKRONOSと書かれた画面から機械でいじっているよう

な声が聞こえた。

『では第1回戦のゲームを発表しましょう。それは

『天国と地獄ゲーム』

『まず始めに3つのボックスがこの会場にあります。その3つのボックスは色は違いますが、中身は全く同じものになっております。そのボックスは右手に見える投票室に設置されています。では皆様、投票室にお入りください』

全てのプレイヤーは投票室へと入った。その投票室には教会においてありそうな本がたくさん詰まっている本棚や木箱などのものが置かれていた。奥の真ん中には3つのボックスがあった。赤色。黄色。青色。その三色の大きなボックスが置いてあった。

『この投票室はゲーム中では一人ずつしか入る事が出来ません。そして一人がこの投票室に入れる時間は5分となります。ちなみに一回の投票時間は45分です。では皆様にはこのゲームのリハーサルを行っていただきます。目の前に置いてある自分の名前が書かれた玉をお持ちください』

全員は自分の名前が書かれた玉を持った。

『では好きなボックスに玉をお入れください』

「ちよつと待つて。壁の近くにある黒い箱って何？」

『それはダストボックスとなります。しかし、今は関係ないので後から説明させていただきます。では皆様、投票の方をお願いします。そうして俺たちは投票を終え、先ほどまでいた所に戻っていった。』では結果を見てみましょう』

赤 4個

黄 3個

青 2個

『この時、一番玉が入った赤のボックスに入れたかたの負けになります。そして黄と青に入れたプレイヤーの勝利となります。しかし、今回はあくまでもリハーサルです。本番ではこの後に8回の投票を皆さんに行っていたいただきます。そして、その箱に入っているを皆様にお教えするのは最後の結果だけです。他は玉が多く入った順だけをお教えます。8回の投票は先ほどの投票やり方が少し変わります。二回目からの投票は投票する玉は二つとなります。その二つの玉はどう入れてもらっても変わりません。二つのボックスに入れる事や一つだけ入れる事、投票を拒否することも可能である。しかし、投票室には必ず入ってください。入らなかったプレイヤーは即失格となります。他にも投票の玉を持って外に出る事はできません。ちなみに先ほどありましたダストボックスは使わない玉を入れるものです。お分かりかとは思いますが、二回目からの投票は自分が最初に入れた玉のボックスより、他のボックスを投票する玉を多くするためのものとなります。そして最終的に投票された玉が一番多いボックスに投票されたかたは敗者となります。全員の一回の投票が終わりますとどのボックスがいちばん投票された玉が多いのかを発表させていただきます。ボックスの中身の玉の数は今回と違い発表いたしません。そして一番多くの玉が入ったボックスには次の投票で、そのボックスに投票する事が出来ません。もし、二つのボックスに同じ数の玉が入っていた場合は、二つとも次の投票でそのボックスに投票する事が出来ません。また、三つのボックスに同じ数が投票された場合、次からの投票では全てに投票する事が出来ません。投票された玉が一番多く入っていないボックスに最初に投票したプレイヤーは勝者となります。勝者には敗者がお支払いいただいた一億円の山分けという事になります。例えば、一人だけがこのゲームに勝てば八億円を手に入れる事ができます。もちろん敗者は一億円をお支払いいただきます。』

会場は先ほどより緊張感が増した。

『ではこれよりゲームを開始いたします』

そして、画面は45:00と書かれている画面に変わった。
こうして第三回戦の幕は降りたのだった。

第十八話 ゲームスタート（後書き）

遅くなってすいません。

ストーリーの方がやっと完成いたしました。（ストーリーだけ！！）

書く方も頑張つていきたいと思えます。

これからもよろしく願います。

本当に忙しい事をご理解くださいwww

詳しい事はツイッターでつぶやきます！mixiでもつぶやきます！
ではまた一週間以内につ！

感想、アドバイスなどお待ちしております。

誤字・脱字報告も出来れば願います。

第十九話 賢吾

「あ、あのっ」

希は参加者全員に声をかけた。

「皆さん、全員で協力しませんかっ」

周りはざわついた。

騙し合いのゲームの中でそんな事を言う人なんてなかなかいない。だからみんな戸惑っているのだ。

彼女はついに自分から動き始めたのだ。

「いい意見だとおもうよ」

優里は希に微笑みかけた。

「みんなも協力しない？騙し合うのやめない？」

そして優里も参加者に問いかけた。

「俺も乗る。ゲームから抜きたいやつは抜けさせてやる。もちろんただでだ。ここまで来たって事はマイナスはないはずだ。悪い案ではないと思う」

斗真も希の提案に乗ったようだ。

「僕もいいと思いますよ」

賢吾も乗ってきた。

それから参加者全員は希の提案に乗った。

今までにないような光景だった。

このゲームの中で全員が協力をするなんて……

「じゃあ、まずは全員で青に入れましょう！」

希が出した案。それは全員で同じ色を統一する事だ。最初の投票は青に全員が入れる。それから二回目の投票から全員が違う色である黄か赤に投票すればいい。そうすれば青は必ず勝てるのだ。

そして全員が投票室へ向かった。

一番最初に投票室に入ったのは希だった。

投票室の投票箱の横にある所からツキシロ ノゾミと書かれた玉が出てきた。

私はその玉をすぐに青に入れた。

投票室に入った順番は、希、優里、斗真、賢吾、イシダ、トダ、サタケ、コニシ、タマルの順だった。

『では皆様の投票が終わりましたので、結果を発表したいと思います。す。ただいまの投票の結果は……』

赤

青

黄

ご覧のような結果になりました。そして次の投票は赤の箱に投票する事が出来なくなりました。では5分の休憩となります。』

「な、なんで」

希はただ画面を見ている事しか出来なかった。

「くくく……」

斗真の後ろで誰かがくすくすと笑う声が聞こえた。

斗真は後ろを振り返った。

そこには賢吾の姿があった。

「くくく……はははははは」

「兄さん……」

「俺が裏切り者だよ。俺が何をしたかなんて予想はついていないだろ？俺は投票室に入って投票箱の横に一つの紙を置いておいた。賞金と手にしたいやつは赤に投票しろ。そう書いた紙を置いたのさ。その結果がこれだよ。残念だったねツキシロさん。みんなは金が欲しいんだよ。」

「賢吾っ！あんなに考えてるのっ！！！」

「ふふ、なに考えてるかだっ？勝つ事に決まってるじゃないかっ

！これは騙し合いのゲームだよ。騙して何が悪いっ！」

パニーー

優里は賢吾を叩いた。

「叩いたって何も変わらないよ。あと気をつけた方がいいよ。このゲームで暴力行為は禁止だからね」

「賢吾……」

姉さんは賢吾を睨みつけた。

「甘いんだよ、協力なんて。みんなで勝とうなんて無理なんだよつ。だからこうやって騙されるんだよ。さあ、この状況をどう切り抜ける？ 姉さん…… 斗真…… ふ、ふふつ、はははははは……」

「兄さん……」

「んっ、どうした。怖じ気づいたか？」

「そんなわけないだろ。この勝負……俺たちが勝つ！」

「ふっ、出来るかな？ 斗真に」

「ああ、出来るさ」

「ふふっ、楽しみにしてるよ、斗真……」

賢吾はこの場から去っていった。

こうして俺たちは不利な立場に置かされてしまったのである。

第十九話 賢吾（後書き）

疲れましたwww

二つは疲れるね！

でも続けていくから安心してください！

後書きが短いですが勘弁してください。

ではまた！

感想、アドバイスなどお待ちしております。

誤字・脱字報告も出来ればお願いします。

第二十話 二人（前書き）

第十八話のルール説明を変更しました。

肝心なものが抜けていましたので、確認をお願いします。

このゲームは一番玉の数が多いボックスには、次の投票時間に投票できないという非常に大変なルールが抜けていました。

すいませんwww

では本編をどうぞ!!!

第二十話 二人

「斗真、何か策でもあるの」

姉さんは斗真に言った。

「ああ、一つだけある」

「どんな策なんですか？人数の方は向こうが上だから……」

希は心配そうに言ってきた。

「確かに、人数が少ないのは不利だ。でもこのゲームは多数決ではない。そして今の箱の中身はこうなっていると思う」

赤	6
青	3
黄	0

「そして今回は赤に投票する事が出来ない。そして二回目の結果は」

青	1	5
赤	6	
黄	0	

「この結果はどういう意味かわかるか？」

「……っあ！もう青には投票できない」

希は何かをひらめいたかのように斗真に言った。

「そう、そこで俺たちは青を赤に投票はせず、ゲーム最終まで青を投票できなくすればいい。そして最後に赤に票を入れる。でもこの策には賢吾も気づいてくるはずだ。そしてこの勝負は7回目の投票で相手の色のボックスが投票不可になれば俺たちは負ける。逆に俺

たちのボックスが投票不可になれば勝ちの可能性が上がる」

「どういう事ですか？」

「もし7回目に俺たちの色のボックスが投票不可になったとしよう。そのボックスは投票できないから敵がどれだけの玉を持っていようと投票する事は出来ない。そのうちに俺たちが相手のボックスを一番玉を多くいれた場合は俺たちの勝利となる。でもこっちの玉を投票できる数は向こうより圧倒的に少ない。だから8回目の投票で相手のボックスを一番玉を多く入れられなければ俺たちは負けてしま
う」

「じゃあ、こっちは不利な訳だ」

姉さんが心配そうに言った。

「でも何か策はあるはずだ」

「最初の投票はどうします？」

希が言ってきた

「俺たちは最初の投票では何もしない。様子見だ。賢吾はどんな策を取ってくるか、それが一番の問題だ」

『では二回目の投票が終わりましたので、結果を発表したいと思います。ただしいまの投票の結果は……』

青 赤 黄

『ご覧のような結果になりました。そして次の投票は青の箱に投票する事が出来なくなりました。では5分の休憩となります。』
まずは予想通りだ。まだなにもわからない。

賢吾は自分たちのチームを集めていた。

「次は黄にすべて投票する」

「なんでだ？」

チームのメンバーの一人が言ってきた。

「向こうは最後まで赤のボックスを一番数を多くしてきません。なぜなら青が投票可能になると俺たちの12個の玉が入って、思いつきり離されてしまうからです。そして、この勝負は7回目の投票で自分の色のボックスを投票できなくなった方が勝ちなんです。8回目の投票に俺たちが青に投票する事が出来れば間違いなく勝てる。こっちは投票する玉の数が上ですから……」

さて、斗真はどういう策でくるかな？まあ、せいぜい俺を楽しませてくれよ。それにしてもあいつらは甘い、あんなことが起こったのにまだ人を信用しようとしている。ふっ、愚かな奴らだ。でも時期に気づくだろう。信用の無意味さを……。

賢吾は笑みを浮かべた。

第二十話 二人（後書き）

ゲームが今までよりも難しさが増えます。

なのでどこどころミスってる所があるかもしれませんが、その点にご注意ください。

最近、違う小説の案が浮かんでしまいました。

早く書きたいなー。

でもいろいろな設定と時間がもつと必要になってくるのがつらいな。

この小説のピリオドをどうするか考えてないwww

さて、何回戦まで続くのか？

まだ4つくらいゲームが必要なwww

もうすぐカイジの映画ですね。まだ二ヶ月もあるけどwww

沼がかっこいいので是非見に行きたいです。

これからはどんどん書いていこうと思いますので、応援よろしくお願ひします！

twitterの方もお願いしますwww

以上、黒狐でした！

感想、アドバイスなどお待ちしております。

誤字・脱字報告も出来ればお願いします。

第二十一話 解放

そして三回目の投票終了まで10分を切っていた。

「斗真さん、指示通りにしてきました」

「ああ、ありがとう。姉さん、月城さん。

俺は二人を呼んだ。

「んっ？」

姉さんが振り返った。

「なんですか？」

希は斗真の横で返事をした。

「多分、この投票で敵チームの動きがわかるはずだと思う。これからどう入れてくるのか。ここが正念場だ」

投票の順番は、賢吾のチーム、そのあとに斗真達の順番だった。

『では三回目の投票が終わりましたので、結果を発表したいと思います。ただしいまの投票の結果は……』

赤 黄 青

ご覧のような結果になりました。そして次の投票は青の箱に投票する事が出来なくなりました。では5分の休憩となります。』
そして、ここから斗真と賢吾が動き始める。

「やはり黄色のボックスに入れてきたか……」

斗真は考えだした。

「どう動くんですか？」

希が聞いてきた。

「黄色が重くなったという事は、赤色のボックスに玉の数を増やしたくないと考えている。そして無理矢理、青のボックスを投票可能にするつもりだ。そして俺たちが取っていた策。最後まで赤のボックスを一番数を多くしない策」

「それってまずいんじゃないの？」

「いや、大丈夫だ。それより兄さんは何を考えているのかが気になる。もし、このゲームの穴に気がついていたら厄介だ。意地でも八回目の投票で青を投票不可にさせないといけない。最悪の事態を避けるためにも先手を打たないとっ」

今回の投票の順番は、賢吾のチームがすぐに投票を済ましたに、そのあとに斗真達が投票終了時間直前だった。

「なにか策でもあるのか？斗真」

賢吾は斗真に近づいてきた。

「……何しにきた」

「弟と話するのに理由がいるのか？」

「……」

「まあ、いいだろう。その様子だと何か策があるらしいしな」

賢吾は斗真の元から離れた。

斗真はその背中を睨んでいた。

『では四回目の投票が終わりましたので、結果を発表したいと思います。ただしいまの投票の結果は……』

黄

青、赤

ご覧のような結果になりました。そして次の投票は黄の箱に投票する事が出来なくなりました。では5分の休憩となります。』

ついに、青が投票可能になってしまった。

斗真はソファーに座って画面をじっと見ていた。

やはり、そうだった。

ここから青のボックスにいれることを阻止しなければならない。

青のボックスに入れることを防げば、青のボックスに入る玉が無駄玉になる。

それを俺は狙っている。

その一瞬の隙をつ……！！

第二十一話 解放（後書き）

すみません。

更新がぐんつと遅くなつてしまいました。

遅くなつてしまった理由。

- 1、時間がなかったから。
 - 2、斗真の策が矛盾していたから
- その二つですっ！

本当にすみませんっ！！！！

これからもちよこちよこ更新していきますっ W W W

まだ方針は決まっています。

でもまずは第三回戦を終わらすことを目標にしますっ！！！！
これからもよろしくお願ひします。

第二十二話 限界

「ついに青が投票できるようになってしまいましたね」

「赤と青は15個。黄色はそれ以上。とりあえず、まだ問題は無い。大丈夫だ」

「本当に大丈夫なんですか？」

「ああ」

「大丈夫よ、希ちゃん。斗真はちゃんとやるやつだから」

「そうなんですか？じゃあ、私は斗真さんのこと信じます」

「信頼されてるよ斗真」

優里は斗真の耳元でつぶやいた。

「姉さん…何がしたいの……？」

「なんでもないよ」

「……？」

おれの思った通りならこの先の展開が見やすくなる。
でも俺たちが不利なのは変わらない。
でも負ける訳にはいかない。

『では五回目の投票が終わりましたので、結果を発表したいと思います。結果を公表したいと思いません。ただいまの投票の結果は……』

青 赤

黄

「ご覧のような結果になりました。そして次の投票は青の箱に投票する事が出来なくなりました。では5分の休憩となります」

そして投票六回目も四回目と同様に賢吾は黄色を上げてきた。重さは次のようになった。

黄 青 赤

そして、七回目の運命の投票に入った。

賢吾は自分たちのチームを集めていた。

賢吾はソファーに深く腰をかけていた。

「今回は全て青に投票する」

「おいっ、最後の投票ができないじゃねーか」

トダがつつかかかってきた。

「どうするんだよっ、逆転されたら」

「逆転？あり得ないでしょ。青のボックスにある玉は27個以上。

黄のボックスにあるのは28個以上。青には最初の投票で6個、それから残り6回の玉をすべて入れたら42個。俺たちが今回、すべて青に投票したら負けるだろう。でも、4回目の投票の段階で15個。よって最終は最大39個しか入れられない」

そのときコニシには一つの疑問があった。

「でも、それだったらこっちも39個しか入れられないじゃない」

「いや、実はやつらは38個しか入れられないんだ」

「なぜ？」

「さっきの六回目の投票で俺たちが青のボックスに入れた玉の数はぜんぶで27個。その数は赤のボックスよりも多かった。ということとは赤の玉は26個以下しか入れられない。そしてそこから、毎回

毎回6個ずつ玉を赤のボックスに入れると最大で38個。俺たちに一個及ばないという訳だ」

「でも、もしかしたら最初の投票できなかつたときに何個か赤のボックスに入れてたら……」

コニシは言った。

「その心配も無い。四回目のとき赤と青のボックスは15個。それからこつちに入れたら、自分たちが赤に投票する玉が減ってしまう。どちらにせよ、俺たちの勝利に変わりはない」

「そ、そうかつ！」

イシダは喜び始めた。

賢吾のチームは盛り上がった。

喜びあっていた。

賢吾は笑みを浮かべた。

そして七回目の投票はすべて終わった。

順番は、希、優里、イシダ、トダ、サタケ、コニシ、タマル、賢吾、斗真の順だった。

そして斗真は投票室から出てきた。

誰かが扉の前に立っていた。

それは賢吾の姿であった。

「斗真……俺の勝ちだ。そしてこのゲームを支配しているのは俺だっ！」

「どうかな？」

「んっ？」

「このゲームは少数派にも勝ち目がある」

「でも少ない方は圧倒的不利という状況は変わらないだろ？」

「結果を見てみたらどうだ？すぐにわかるさ。このゲームの結果が

……」

「ふっ、面白い」

二人は画面を見た。

『では七回目の投票が終わりましたので、結果を発表したいと思います。ただいまの投票の結果は……』

青

黄

赤

ご覧のような結果になりました。そして次の投票は青の箱に投票する事が出来なくなりました。では5分の休憩となります。』

「よし、これで俺たちは勝利確定だっ！……」

「やったーっ！……」

賢吾のチームはさらに盛り上がった。

「ふっ、喜んでいるところ悪いんだが、このゲーム……俺たちの勝ちだっ！……」

「な、なに言ってるんだよ」

「俺はいたって正常だ」

「どうみたって俺たちの勝ちだろ」

トダは斗真につっかかってきた。

「いや、俺たちの勝ちだ」

「どうしてそこまで言えるっ！？」

「あれっ、気づいてないのか？このゲームの必勝法……」

斗真は笑みを浮かべた。

第二十二話 限界（後書き）

ちよこちよこ書くのはやはり駄目ですね。

アイデアがバンバン飛んでいく。

これからは一ゲームを完成させてから、投稿します。

もうすぐ、第三ゲームが終了する予定です。

わからないことがあれば、聞いてください。

これからもどんどん書いていこうと思いますので、応援よろしくお願ひします！

twitterの方もお願いします。

以上、黒狐でした！

感想、アドバイスなどお待ちしております。

誤字・脱字報告も出来ればお願いします。

第二十三話 チェックメイト

「必勝法？」

「ああ、そのようすだと気づいてないようだな」

「ふっ、面白い。結果を楽しみにしてるよ」

賢吾は投票室へと向かった。

賢吾のチームは全員が投票を済ませた。

トダはソファーに座っている賢吾に近づいた。

「大丈夫だよな？」

「ああ、もちろん俺が勝つに決まってる」

「向こうは策がー」

「問題ないです。俺の計画通りだ」

「そ、それなら問題ない」

賢吾は笑みを浮かべていた。

そして、八回目の投票が終了した。

すべてのゲームは終わったのだ。

賢吾のチームは勝ちを確信したが、斗真の言葉により確信を持たなくなってしまった。

「八回目の投票が終了いたしました。これですべての投票が終了いたしました。皆様、おつかれさまでした。では、これより結果を発

表いたします』

会場は沈黙に包まれた。

『まずは青のボックスの玉の数……39個』

「よしっ！」

その結果により喜ぶものや安心するものが出てきた。

「深見斗真さん、残念でしたね」

イシダは斗真に言った。

「何がだ？」

「ふっ、あなたにはもう勝つことなど不可能なんですよ」

「どうしてそんなことが言える？」

「決まってるじゃないですか。投票六回目の時、青のボックスには27個の玉が入っていた。そして、赤のボックスには一番玉の数が少なかった。ということは青のボックスには26個以下の数が入っているということ。つまり、赤に入れられる最大の数は38個までということなんです。おわかりいただけました」

「いいや、わからないね」

「な、なぜっ！」

「なぜなら、俺たちは42個の玉を赤のボックスに入れたからだ」

「なっ！」「えっ！」「な、なぜ？」

「あ、ありえない。そんなはずはないっ！！！！」

「どうしてそんなことが言える？」

「さっきも言ったー」

「最大が38個というのは間違ってる。最大は42個だ。赤のボックスは7回投票することが出来た。そして、俺たちが一回の投票につき配られる玉は6個。だから入れることが可能な玉は42個」

「でもー」

「俺たちは玉を出すとボックスになんて捨てていない」

「なっ」

「その捨てていない玉を最後のときに、すべて投票した」

「でも、投票室から玉を持ち出すことは禁じられているはずっ！！」

「！」

「ああ、その通りだ」

「じゃあ」

「隠してたんだよ。投票室に。隠せるところならあるはずだよな。あんなにものが散乱してたんだから」

「そ、そんな……」

イシダは膝から地面に崩れ落ちた。

そして、斗真は賢吾のもとに近づいた。

「兄さん、チエックメイトだ」

斗真は賢吾に言い放った。

第二十三話 チェックメイト（後書き）

次が三回戦のラストとなる予定ですっ！

更新はきつとすぐになります。

四回戦の更新は遅くなるかも？

五回戦からのゲームはまだ未定です。

なにかこの世に存在していない完全オリジナルゲームを作り出さなければっ！！！！

…… かつこ良く言ってみましたwww

そんなゲームを作って、話を作っていきたいと思います。

ゲームの案も募集してます。

私が面白そうだと思った、話に合うものはバンバン採用していきたいと思います。

応援の方、よろしく願います。

俺たちはあの投票室を隅から隅まで探した。どこにも無かったはずだ。いったい、兄さんはなぜあそこまで自身を持てるのか？月城さんに裏切りが無い限り、無理だ。そんなことがあるはず無い。今は月城さんを信じるしか……大丈夫だ。

『赤のボツクスの数……45個』

その時点で斗真の負けは無くなった。

そして、賢吾のチームの人たちは嘆くものや、泣くものなどがない。賢吾は相変わらず、笑みを浮かべながらソファーにどっしりと座っている。

「なっ！……！」

斗真は驚きを隠せなかった。

「やりましたね、斗真さん……斗真さん？」

希は勝ちを喜んでいた。

しかし、斗真は前の画面をひたすら見つめていた。

「斗真、どうしたの？」

「45個……おかしくないか？」

「確かに投票したのは42個のはずだったけど、誰かが入れたんじゃない？」

「入れるときは七回目と八回目の二回しかありえない。そんなタイミングで誰が入れる？」

「誰かが裏切ったんじゃないですか？」

「裏切る？向こうに何のメリットがあるんだ」

『では最後に黄のボツクスの玉の数……28個』

斗真達の勝利は決まった。しかし、素直に喜べない。それはひとつの疑問が残っているからである。入るはず無い3つの玉……

『よって、勝者は青のボツクスに投票したフカミトウマ様、ツキシロノゾミ様、フカミユリ様、そして、黄のボツクスに投票されたフカミケンゴ様の四名が勝者となります。そして、お一人様の賞金は、二億二千五百万となります』

「なっ！」「えっ！」「」

そ、そういうことだったのか。俺たちはまんまと賢吾に踊らされていたんだ。黄のボックスなんて、青を投票可能にするものだと認識していた。それが間違っていたのだ。

そして、賢吾の勝つという言葉は本当だったんだ。あの自信も。

「兄さん……」

「馬鹿がっ、今頃気づいたか……」

後ろから賢吾は声をかけてきた。

「人を信用する、協力なんてするから負けるんだ」

「……」

「そんなことないですっ！……」

「ほう、君が斗真を変えたのか。ふっ、よくそんなことができたな、それとも何か目的があって近づいたんじゃないのか？」

「違いますっ！……！！！」

「まあ、どっちでもいい……確か斗真はこのゲームを潰そうとしているらしいな。でも、そんな甘さでは俺には勝てない。組織にも勝つことなんて絶対出来ない……！！！」

「……」

斗真は賢吾をただ見ているしか出来なかった。

「そ、そんなこと無いですっ！……！！！」

「ほう、たいした自信だな。じゃあ、ここまで来るのにいくら稼いだ？」

「……ぜ、ゼロです」

「ふっ、負けた人の分も自分で払ったのか？」

「はい」

「ふっ、甘いね、甘すぎる。ちなみに俺は……十七億だ。そして今回を合わせると十九億二千五百」

「なっ」「えっ」「」

「そう、全てゲームで俺は全て一人勝ちなんだ。しかし、今回は一人勝ちは出来なかった。残念だよ」

「これで四回戦を終了とさせていただきます。四回戦の詳細は後日

にお送りします』

するとKRONOSの関係者はすぐにこの部屋から出て行った。

「あっ、そうそう。このゲームの主催者、俺だから」

「け、賢吾…あんだ、何言ってるの？」

「もちろん、本当のことだ。そして、このゲームのルールは参加者と同じタイミングで知らされる。そして、チーム分けも部下に任せられている。俺は参加者と同じ立場でやっている

。もちろん公平だよ。ふふっ、今回は退屈じゃなかったな、面白かったよ…斗真」

「…兄さん」

斗真は拳を強く握った。

「あと、次のゲームは多分斗真と当たらない。俺はランダムで誰と戦うか抽選で決まる。だから今度戦うときは楽しみにしてるよ、今度は全力で潰しに行く…ふふっ……………」

賢吾は部屋から出て行った。

「斗真さん……………」

希が横に近づいてきた。

「悪い、一人にしてくれ」

俺はただ俯いていた。

今はそれをしか出来なかった。

兄さんは一人勝ち出来なかったんじゃない。しなかったのだ。

協力というのがおかしかったんだろうか？

人は信じては生きていけないのだろうか？

嘘が必要な世界なのか？

前のように仮面をかぶった生活の方が正しかったのか？

すべては嘘にまみれた世界に戻るべきなのか？

もう何がなんだかわからなくなった。

第二十四話 計画通り（後書き）

さて、第三回戦が終了いたしました。

これまでで一番凄かったと思います。

時間がかかった上に、いくつもの矛盾がありましたからね。

さて、次回からは第四回戦に入っていきます。

今回みたいに書いて更新、書いて更新という形よりも、書いて書いて書いて、更新更新更新のような形にしたいと思います。

第四回戦からは読者の作ったオリジナルゲームに私が少し、改良を加えたゲームが登場します。

メインゲームは黒狐のオリジナルゲームです。

四回戦ではどんなゲームが登場するのか？

そして、新たなKRONOSの過去、秘密がっ！

お楽しみにっ！

ゲームの案も募集してます。

私が面白そうだと思った、話に合うものはバンバン採用していきたいと思います。

これからも応援よろしくお願いします！

以上、今から絵の具を使う黒狐でしたWWW

大学の宿題です。

めんどくせえー！

黒狐の愚痴など聴きたい方はツイッターでっ！！！！！！！！

感想、アドバイスなどお待ちしております。

誤字・脱字報告も出来ればお願いします。

評価の方もよろしくお願いしますっ！！！！！！！！！！

第二十五話 リミットペリヤード

俺はあの後、誰とも話さなかった。

何も考えられなかった。

俺は兄さんに負けた。

そう、負けたんだ。

兄さんなら全員を倒せたはずだ。

兄さんは、何を企んでいるのか……

いつしか朝になっていた。

でも起きる気はしなかった。

ピンポーンー

チャイムが鳴った。

KRONOSの関係者が来るなら早すぎる。ゲームが終わってから来るのはおかしいはずだ。

姉さん？月城さん？

とりあえず俺は思い体を起こして、ドアを開けた。

そこにいたのは、いつも俺にKRONOSの招待状を渡したあの男であった。

いつものように無表情だった。

「……何しにきた」

「深見斗真。お前を迎えにきた。お前の兄が会いたがっている」

兄さん……！？何を企んでいる？

「……連れて行け」

俺は兄さんに会うことにした。すべての真相を知るために

そうして、俺は高級車に乗り、どこかに向かった。

ただ何も考えること無く……

着いた場所はどこかの高いビルだった。周りにもそんなビルはたくさんあった。

そして、俺は案内されるがまま、男の後ろをついていった。

男は一つの扉を開けた。

そこはカジノだった。

そう、裏カジノだ。

カジノも俺は入ったことは無い。

どのギャンブルもレートが高額なものばかりだ。

金の持つてそんな人もいれば、サラリーマンや、チンピラのような人もいた。

中のゲームはルーレットや、トランプ、スロットなど様々なものがあった。

俺はそれらのゲームを少し見るだけだった。

そして、男についていく。

「「「「「「「「「「「「わーっ!!!」」」」」」」」」」」」

奥に進んでいると、奥の方からたくさんの歓声が聞こえてきた。人ごみまで出ていた。

「んっ？」

俺は観客の視線が集まる先を見た。

「なっ!!!」

その先にあつたのは、二人の姿があつた。

一人は眼鏡をかけた中年の人。

もう一人は賢吾の姿があつた。

「これはこのカジノのメイン、VSだ」

「VS？」

「ああ、このゲームはKRONOSの支配者、深見賢吾と直接対決するものだ。その参加費は5000万。そして、賢吾に勝利すれば、その10億の5億を手にすることが出来る」

「……………」
「そして、このゲームはもちろん全て平等だ。まず参加者にはクジでやるゲームを決める。そして、そのゲームはこの一ゲームで破棄される。もう、ここでやることは出来ない。もちろん、どちらとも初めてのゲームだ。そして、そういうような条件の中で、賢吾は55戦で55勝0敗だ」

「っ……！」
そのステージでは挑戦者がクジを引いた。
そして、ステージにビリヤード台が運ばれてきた。
それが今回のゲームらしい。

でも、ただそのゲームをやるだけであろうか？
「お前はただビリヤードをやるとでも思っているのか？」

「いや、思っていない。ここのメインなら、どうせKRONOSみたいにゲームのルールを変えてくるんだろ？」

「ああ、その通りだ」
そして、ビリヤード台には玉がセットされた。

その玉は全てが黒色の玉であった。そして、逆サイドには白い玉が一個。

この時点で、普通のビリヤードではない。
『今回のゲームは『リミットビリヤード』となりました。』

このゲームは普通のビリヤードと違い、玉の数が15個あります。但し、全部真っ黒です。番号など存在しません。
まず、コイントスで先手を決めます。

最初の撃ちはプレイヤーが行います。それからゲームスタートです。普通のビリヤードなら順番通りに撃ちますが、このゲームは白玉以外の全ての玉が全て黒であることから、どれの黒いを撃って構いません。但し、普通のビリヤードと同じように白玉が穴に落ちたり、自分の番で二回連続、黒玉を穴に落とせなかったり、白玉が別の玉に当たらなかった場合は『ファール』となります。その時は、ペナルティーとして、相手に5000万円支払ってもらいます。黒玉を

落とすことが出来れば、もう一度玉を打つことが出来ます。なお、自分の番に落とせる玉の数は3つです。それ以上落とした場合も、相手に5000万円支払ってもらいます。

最後の黒玉を穴に落としたりプレーヤーの勝利です。ルールは以上となります。よろしいですね？」

「……」

二人は黙ったままであった。

『では、これより『リミットビリヤード』開始です』
そうして、ゲームの幕が開いた。

第二十五話 リミットペリヤード（後書き）

眠たい。

いきなり愚痴をこぼしたところで後書きにいきましょう。

最近、この小説のページ数少くないと疑問に思い始めました。

みなさんはこんな感じでいいと思いますか？

もう少し、場面、人の心情を遠回しな表現にした方がいいのでしょうか？

出来るだけ伝わりやすいように頑張りたいと思います。

大泉洋にめっちゃハマってしまった黒狐でした。

ちなみに、映画『探偵はBARにいる』で爆発しました。

火がついたのは『水曜どうでしょう』からです。

好きな有名人が、福山雅治、大泉洋となりましたっ！！！！

以上ですwww

黒狐の愚痴など聴きたい方はツイッターでっ！！！！！！

感想、アドバイスなどお待ちしております。

誤字・脱字報告も出来ればお願いします。

評価の方もよろしく願いますっ！！！！！！！！！！

第二十六話 先攻と後攻

そして、仮面をかぶった人により、コイントスが行われようとした。

「コイントスなんていらぬ。お前に選ばせてやるよ。それくらいのチャンスはくれてやる」

「威張っているのも今のうちだ。じゃあ、先攻だ」

「どうぞ…ふっ」

結果は先攻は挑戦者の男となった。

そして、その男は笑みを浮かべていた。

『では挑戦者の方、始めてください』

そして、男は慎重に準備した。

そして、5秒後くらい経ってから白玉を打った。

その白玉はど真ん中を打ち抜いた。そして、黒玉が二個がポケットに落ちた。

黒玉 残り13個

さらに挑戦者の男はもうひとつ黒玉をポケットに入れた。

黒玉 残り12個

挑戦者の男はとても慎重に打っていた。

まあ、冷静になる。なんせ、5000万かかっているゲームだから。

そして、男は白玉を黒玉にあて、黒玉はどのポケットにも入らなかった。

賢吾の番が回ってきた。

賢吾はソファーから立ち上がった。

そして、賢吾はもう決まっていたかのように、構えるとすぐに白玉を打った。

その白玉は黒玉にぶつかつたが、黒玉はポケットには入らなかつた。

そして、賢吾はすぐにその場所を離れた。

挑戦者の男の番が回ってきた。

その男は白玉を軽く打ち、黒玉に当てたが、その男もまた、黒玉はどのポケットにも入らなかつた。

「ふっ、どうやらお前も馬鹿ではないようだな」

賢吾は見下すように言った。

「でも、あなたが不利なのはかわりませんよ。このゲームの勝利するには、玉を落とす個数が11個目を取れば、このゲームは必ず勝てる。そして、このゲームでは先攻が必ず勝てる」

そう、この男の言う通りだ。

11個目を落とせることが出来れば、このゲームの勝者となる。そして、11個目を相手に取らせないようにするためには、3個目、7個目を取るのだ。このゲームでは黒玉を3つまでしかポケットに玉をいれることが出来ない。そして、三個目は先攻が取る事が出来る。だから、先攻が圧倒的有利なのだ。これがこのゲームの必勝法だ。

後攻はどうあがこうとも11個目はとれない。

相手がミスをしなれば。

「お前は俺に負けるんだ」

割れんばかりの歓声が起こった。

「ふっ、お前は最後の玉を入れることは出来ない」

そういつてソファアから立ち上がった。

賢吾の表情はいつも通り相手を見下す感じた。

「お前がこの俺に勝てるはず無い」

笑みを浮かべながら挑戦者の男に言い放った。

「ふ、ふざけるな」

「ふざけてないさ」

そういつて、すぐに白玉を打ち、黒玉をポケットに綺麗に入れた。「俺はビリヤードをやったんだ」

「達人ではないのだろう？ただやってただけ。ふっ、笑わせるのもいい加減にしろ」

そういいながら白玉を軽く打ち、白玉は黒玉に弱い勢いで当たっただけであった。

「では、どうぞ。これからあなたは八個連続で玉をポケットに入れないといけない」

「か、簡単なー」

「断言する、お前は俺に勝てない。絶対だ。ふふっ、あははははははははははははははは」

黒玉 残り11個

そして、挑戦者の男は台の前立った。

男はそこで深呼吸をした。

賢吾は笑みを浮かべながらその姿を見ているだけであった。

挑戦者の男はさっきの時よりも長い時間をかけ、白玉を打った。

そして、その白い玉は黒玉に当たり、ポケットに入れることに成功した。

「ふー」

黒玉 残り10個

「まだ8個もあるんだぜ。君にすべて落とせるのかな？ふふっ」
「……………」

くそっ、なんで不利なあいつがあんなに威張ってるんだよ。絶対勝つてやる!!!

挑戦者の男は台に近づき、打つ構えをした。

そして、数秒かけて、白玉を打った。

その玉は黒玉に当たって、当たった黒玉はポケットに入った。

黒玉 残り9個

よしっ、この調子でっ!!!!

男はまた台で打つ構えをして、白玉を打った。

第二十六話 先攻と後攻（後書き）

皆さん、ご存知、黒狐です。

このゲームは面白いつ！と思ったのですが、文章を作るのが難しい。そこが難点です。

前回、いい忘れていたのですが、このゲームの原案を作ったのは、読者のシルバーさんです。

本当にありがとうございます。

そして、すいません。

そして、またしても全身筋肉痛。もう嫌だ。

つらい、辛すぎる。

でも、将来のためならいつくぞつ！。

さっき、足をつった黒狐でした。

黒狐の愚痴など聴きたい方はツイッターでっ！！！！！！！

最近、あまり更新してなかったので、どんどんつぶやいていきます
っ！

感想、アドバイスなどお待ちしております。

誤字・脱字報告も出来ればお願いします。

評価の方もよろしく願いますっ！！！！！！！！！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7860u/>

TRUTH

2011年11月3日02時06分発行